



今
回
の
内
容

- ① 地域医療連携室 職員紹介 ～よろしくお願いたします。～ 吉田珠美
- ② 新任医師の挨拶 (部門長紹介)
 - 1. 副院長就任の御挨拶 大上史朗
 - 2. がん治療センター長紹介 名和由一郎
 - 3. 脳卒中センター長紹介 岩田真治
- ③ 診療科紹介 新生児内科 穂吉眞之介
- ④ 第136回医療連携懇話会「上肢・手外科診療について」を終えて 椿崇仁
- ⑤ コラムSP. 文句の多い医者をつぶやき 岡本賢二郎
- ⑥ お知らせ (次回の医療連携懇話会のお知らせ・媛さくらネットについて・メール登録のご案内)

① よろしくお願いたします。

医療ソーシャルワーカー 吉田 珠美

今年度入職させていただきました吉田珠美と申します。前職では、障害児や高齢者分野の福祉関係の現場での仕事に携わってまいりました。

地元の松山で生まれ育ち、小さな頃より「県病院」と呼んで、家族や親せき、地域の方が身近にお世話になっていましたが、今度は、医療ソーシャルワーカーとして務めさせていただくことになり、患者様やご家族様のために恩返しができるれば幸いです。

毎日、常に人と人とのかかわりを大切にされている先輩方のもと、この恵まれた環境の中で、日々多くのことを学ばせていただいております。私も先輩方のように、当院で関連職種の皆様とご一緒に、内外の橋渡し役として患者様やご家族様へ優しく寄り添い、正しく理解して適切な対応ができますよう、これからも日々自己研鑽に努め、邁進していきたいと思っております。



今後ともどうぞよろしくお願いたします。

② 副院長就任の御挨拶

副院長 大上 史朗

皆様、こんにちは。本年4月に副院長を拝命しました大上史朗（おおうえ しろ）です。一言御挨拶申し上げます。

私は松山市出身で、松山市内の小・中学校、松山東高等学校を経て、1978年に愛媛大学医学部医学科へ入学しました。1984年3月に愛媛大学を卒業し、同年4月に愛媛大学医学部脳神経外科学講座に入局しました。入局1年後に愛媛大学医学系研究科（大学院）へ入学し、当時脳血管障害の主要テーマであった“くも膜下出血後の脳血管攣縮”に関する研究で、1989年に博士号を取得しました。大学院卒業後は、松山市内の貞本病院で約5年間臨床医として勤務したのち、愛媛大学病院へ帰り、初期には脳血管障害を中心に、途中からは脳腫瘍を中心に、臨床と研究を行ってきました。また、2005年～2007年にはアメリカのデューク大学へ留学し、残念ながら、今年亡くなられましたが、頭蓋底外科の世界的権威であられた福島孝徳先生のもとで、頭蓋底外科手術の手術手技と微小手術解剖を学んできました。その後、2016年4月に愛媛県立中央病院に赴任し、脳神経外科診療部長を経て、元脳卒中センター長である河野兼久先生が定年退職された2019年から脳卒中センター長となりました。それ以降は、脳卒中疾患を中心に、脳腫瘍、頭部外傷などの脳・神経・脊髄疾患などの診療を行う脳神経外科および脳神経内科の責任者として尽力してまいりました。

特に、当院の使命である高度急性期医療の一つである、脳梗塞超急性期の治療である血栓溶解療法や血栓回収療法の適応の可能性のある患者さんをはじめとして、救急疾患の多い脳神経疾患を積極的に受け入れてまいりました。今まで、地域の先生方から多くの患者さんをご紹介いただき、誠にありがとうございます。私自身、地元の愛媛大学医学部の卒業生であることから、愛媛大学の先輩の先生方はもちろんのこと、同級生ならびに後輩の先生方にも大変お世話になっております。また、大学以前も松山市内で生まれ育ったこともあり、その頃の同級生にもお世話になっております。たとえば、道後で開業されている田淵内科医院の田淵勝彦先生は小学校と高校の同級生ですし、山越で開業されている村上皮膚科クリニックの村上早織先生は中学校・高校・大学の同級生です。さらに、中学校・高校から大学、その後、医師になっても続けていたバスケットボール（最後は、アキレス腱断裂で止めましたが）関連では、大学バスケットボール部の後輩の先生方にも助けられています。後輩の先生方には、済生会松山病院副院長の渡辺浩毅先生、松山西病院院長の俊野昭彦先生、松山市医師会長・矢野内科の矢野誠先生、当院耳鼻咽喉科・頭頸部外科主任部長の本多伸光先生たちがいらっしやいます。

今回、本年4月からは、副院長ならびに経営改革推進室長補佐を拝命いたしました。

今までは、脳神経疾患の診療を中心に働いてまいりましたが、今後は、診療はもちろんではありますが、病院全体を考えつつ、職責を担っていきたくと考えています。しかし、私の当院の職歴は8年間であり、当院の管理職のほとんどの先生方の20年以上の職歴には到底及びません。他の管理職の先生方の御意見を伺いながら、副院長としての職責を務めていきたくと思っています。ただ、職歴は短いものの、他病院の内情を知っていることを生かして、他病院の優れている点を新たに導入しつつ、当院の優れた点はさらに伸ばしていきたいと考えています。また、先日の報道にもありましたが、長年黒字であった当院も、コロナ感染状況による患者数の減少等により、昨年度は赤字化してしまいました。医師の働き方改革も重なり、今後の経営状況の先行きは不明であります。経営改革推進室長補佐として、中西院長や他の管理職の先生方とともに、患者さんの診療には影響が及ばないようにしつつ、経営改善にも努めてまいります。

皆様におかれましては、今後とも愛媛県立中央病院をよろしく願いたします。

② がん治療センター長紹介

がん治療センター長 名和 由一郎

4月1日付で、がん治療センター長に就任しました、名和由一郎です。これまで10年以上にわたり臨床研修に携わり、昨年まで臨床研修センター長を務め、初期研修医の教育改革に努めて参りましたが、今年度からは本業の“がん医療”に注力することになりました。私の専門は血液で、初期研修を終えた後から、血液がんの診療に専念して参りました。血液を専門とするきっかけは、卒後4年目に大学に戻った際に、所属教室教授の専門である造血幹細胞移植に興味を持ったことです。現在、免疫チェックポイント阻害剤などの固形腫瘍治療においてもがん免疫療法が広がっていますが、同種造血幹細胞移植はドナーのT細胞を用いて白血病の再発を抑制するという究極のがん免疫療法であり、薬物療法とは異なる細胞治療に魅力を感じて携わることになりました。当院は古くから四国の移植のメッカであり、私の専門性を活かすため、1997年に大学から異動して参りました。このように私は移植医療から血液診療の道を行ってきましたが、移植が適応ではない血液悪性疾患も診療することも多くなり、臨床の現場で患者さんの病気に真摯に向き合い、長期間にわたって支援することにやりがいを感じ、初診時からの緩和ケアの重要性も認識するようになりました。

当時、血液疾患において緩和ケアは不要だという風潮もありましたが、私は、どのがん種も同じと考えていて、血液以外のがん種についても、幅広く学んでみたいと思い、2013年に臨床腫瘍学会のがん薬物療法専門医の資格を当院で初めて取得しました。この資格取得には、全がん種の薬物療法を学ぶ必要があり、広い視野で腫瘍を捉えることができるようになりました。現在では、私を含め3名の医師が取得しています。

当院は2007年1月31日に「地域がん診療連携拠点病院」の指定を受け、がん診療の機能を強化するため、2009年春に当センターを設立しました。救急医療に重点を置いていた当院もがん医療に力を注ぐきっかけとなりました。現在では、ロボットを用いた低侵襲手術や安全な外来化学療法、カンサーボード、緩和ケア、がん相談支援、がんゲノム、両立支援、AYA世代患者支援チームなど、診断・治療・支援について充実したがん医療を提供しています。外来化学療法については、2005年に旧病院の未使用部屋を改装し、私と看護師2人の3人で8床のベッドで開始したことを覚えています。現在では、点滴注射が9,461件、皮下筋肉注射が2,048件（2023年度）行われ、県内でも多くの患者さんが外来で治療を受けています。また、15歳から39歳のAYA世代の患者さんに対しては小児科の先生と協力して新たなサポートチームを組織し、支援体制を充実させています。当院は各診療科の壁が低く、定期的に行われるカンサーボードでは多職種が参加し、方針を共有しています。高齢化が進む愛媛県内において、当院の総合病院である強みを活かし「高齢者機能評価」と「意思決定支援」に重点を置き、高齢者ががん患者さんに対しても、最善のがん治療を提供する体制を整えることに取り組んでいきたいと思っております。何とぞよろしくお願いいたします。

② 脳卒中センター長紹介

脳卒中センター長 岩田 真治

2024年4月1日より、脳卒中センター長を拝命いたしました、脳神経外科の岩田真治（いわたしんじ）と申します。初代の河野兼久先生、2代目の大上史朗先生に次いで3代目になります。

私は松山市出身（当院で生まれたい）で、松山東高校から愛媛大学医学部に進み、1990年に卒業しました。卒業後は愛媛大学脳神経外科に入局し、愛媛大学附属病院や市立宇和島病院、愛媛県立今治病院、貞本病院などの関連病院に勤務しました。2006年には獨協医科大学脳神経外科に1年間国内留学し、脊椎脊髄手術のトレーニングを受けました。当院へは2015年4月から勤務しております。現在は脳卒中診療に加え、脊椎脊髄手術、神経内視鏡手術、小児脳神経手術を主に行っております。

趣味は小学5年生の時から続けているサッカーです。高校の時は愛媛県でベスト4、大学の時は全日本医科学生大会で2位となりました。医師となってからも中予リーグでプレーを続け、現在も愛媛県のシニアリーグでプレーしています。また以前は愛媛県サッカー協会の医事委員長も務めており、2006年からはJリーグに昇格した愛媛FCのチームドクターに就任しました。当初はベンチ入りし、ピッチ上で選手と一緒に戦っていましたが、最近スタンドからサポーターとして声援を送っています。2021年にJ2からJ3に降格した時はかなり落ち込みましたが、2023年のシーズンは見事J3で優勝し、J2復帰を果たしました。今年の目標はJ2優勝、J1昇格ですので、皆さん応援の程よろしくお願い申し上げます。

さて、当院の脳卒中センターは2010年に開設され、現在は脳神経内科医6名と脳神経外科医10名が協力して脳卒中診療（脳梗塞・脳出血・くも膜下出血）に当たっています。私が脳神経外科医になった1990年代と比べると、その治療法の進歩は目覚ましいものがあります。脳梗塞に対しては、その病型（脳塞栓症、アテローム血栓症、ラクナ梗塞）に関わらず、ウロキナーゼを投与していました。当時はMRIが各病院に普及しておらず、またMRIがあっても緊急のMRIは撮れず、そもそも病型分類をするのが難しい時代でした。その後オザグレール、アルガトロバン、エダラボン等の点滴治療を行うようになり、2005年には遺伝子組み換え組織型プラスミノゲン・アクチベータ（アルテプララーゼ）が登場し、急性期脳梗塞の治療が劇的に変化しました。脳梗塞発症3時間（現在は4、5時間）以内であればアルテプララーゼの投与が可能のため、いかに早く患者を搬送・診断するかが重要となりました。2010年からは機械的血栓回収療法が行われるようになりました。これは血管内治療の一種で、頭蓋内に到達可能なマイクロカテーテルを用いて、機械的に血栓を回収する方法で、現在ではスタンダードな治療となっております。劇的に症状が改善する症例が増えてきています。

脳出血治療に関しては従来の開頭血腫除去術・定位的血腫吸引術に加え、2014年に神経内視鏡を用いた脳内血腫除去術が保険収載されました。これは頭蓋骨を穿頭し、その穴から径2.7mmの神経内視鏡を挿入し、脳内血腫を吸引除去する方法で、患者さんにより低侵襲な治療を行い、早期離床・早期リハビリを促すことを目指しています。

くも膜下出血治療では破裂した脳動脈瘤に対し、従来は開頭によるクリッピング術を行っていましたが、最近では血管内治療によるコイル塞栓術が増加しています。またくも膜下出血後の脳血管攣縮に対しては、従来は脳槽ドレナージから脳槽内血腫を排除したり、ウロキナーゼの髄腔内投与、ファスジルの動注療法など様々な治療を行っていました。2022年に新しい薬剤としてエンドセリン受容体拮抗薬であるクラゾセタンが登場し、当院でもすでに30例以上の症例に使用し良好な結果を得ています。

このように脳卒中の治療は日々進化しており、新しい治療法を取り入れ、少しでも良い治療結果が得られるよう、スタッフ一同努力しております。

脳卒中センターでは救急科と連携して、24時間体制で救急患者を受け入れておりますので、急性期脳卒中を疑う患者さんがおられましたら、ご一報ください。今後とも脳卒中センターをよろしくお願い申し上げます。

③ 診療科紹介 新生児内科

新生児内科 主任部長 穉吉 眞之介

●NICUとは？

広義のNICUは「Neonatal Intensive Care Unit（新生児集中治療室）」の略称。呼吸管理が必要な赤ちゃん、チアノーゼや先天性の異常やさまざまな病気を抱えた赤ちゃん、出生体重が1500g未満の非常に小さな赤ちゃんたちを保育器の中で、呼吸、心拍、体温、栄養を管理しています。最も重症の赤ちゃんが入院する狭義のNICUでは、医師は24時間体制で診療にあたりますし、赤ちゃん3人につき1名の看護師の配置が義務づけられています。

またNICUは治療の場であると同時に、赤ちゃんにとっては発育の場、家族にとっては保育の場でもあります。NICUのスタッフは、入院中から育児が始まっていると考え、また家族の不安にも対応できるようにするため、家族を中心に据え、ともに赤ちゃんを育てているという気持ち（ファミリー・センタード・ケア）で、赤ちゃんやパパ・ママに接しています。

●NICUでの新生児医療とは？

愛媛県内の周産期医療関係者との連携が進み、県内のどこで生まれても安心だというシステムが愛媛県に構築されつつあります。その中で、愛媛県立中央病院 総合周産期母子医療センターの新生児部門の役割はきわめて大きく、その責任を日々感じながら、「歩み入る者に安らぎを、去り行く人に幸せを」という理念のもとに、次のような方針で日々の診療にあたっています。

- (1) 洗練された医療
- (2) オープンな医療
- (3) 産科・小児科医療機関との連携
- (4) ひとりひとりの児・家族に配慮した医療
- (5) 療育・福祉との連携

対象疾患は超低出生体重児をはじめとする低出生体重児、呼吸不全、循環不全、新生児仮死、染色体異常、奇形症候群、先天性心疾患、新生児外科疾患、脳外科疾患、形成外科疾患、泌尿器科疾患、高ビリルビン血症、感染症、頭蓋内出血等はもちろん、診断不明の「なんとなく元気がない：not doing well」の状態の児まで、すべての新生児を対象としています。

院内出生児のみならず、当院外での出生の新生児に対しても出生後異常が疑われる場合等には、新生児専用救急車「あいあい号」で新生児のお迎え搬送を24時間365日行っています。

●医師の働き方改革が始まったが、新生児内科の現状は？

NICUでは24時間365日NICU内に医師の常駐が必要であり、夜間でも当直新生児内科医1名、自宅待機医1名を最低限確保し毎年約350~400名の赤ちゃんを24時間体制で受け入れています。産婦人科医、小児外科医、小児科医等の他科の医師、看護師（新生児ケア認定看護師含む）、臨床心理士、薬剤師、理学療法士、言語療法士、保育士など、多くのスタッフと連携して治療をおこなっています。働き方を考えつつ、赤ちゃんたちの診療に弊害が出ないように医師配置に日々頭を悩ませています。根本的な解決は、少子化が加速している事もあわせて鑑みるとより新生児医療の今以上の集約化は必須です。我々新生児内科医は、NICUの中で懸命に生きようとする小さな命たちに真摯に日々向き合っています。

第136回医療連携懇話会 ④ 「上肢・手外科診療について」を終えて

整形外科・リハビリテーション科 主任部長 椿 崇仁

第136回医療連携懇話会は令和6年5月8日に、当院講堂およびWebによるハイブリッド形式にて開催されました。医師のみならず、看護師さん、理学療法士さん、作業療法士さんなど多職種の方々にご参加をいただき誠にありがとうございました。今回は整形外科専門分野の一つである「上肢・手外科診療について」をテーマにご講演を賜りました。

まず始めに整形外科部長の森実圭先生から「当院における上肢・手外科診療-外傷編-」という演題でご講演いただきました。手外科で扱う組織には骨、腱、神経、血管、皮膚があり、実際に演者が行った症例を供覧しながら説明していただきました。手指骨折に対しての鋼線刺入固定やプレート固定、屈筋腱断裂に対しての腱縫合、正中神経や指神経断裂に対しての神経縫合、熱圧挫創や指デグロビングに対しての皮弁や切断肢（指）に対しての再接着など、多くの衝撃的な写真を提示していただきながら、解りやすく説明していただきました。外傷診療での目標は良好な機能回復であり、そのためには早期の創閉鎖、強固な固定、損傷・治療の状態を理解した後療法が重要であるとお話しされていました。

続いて同じく森実圭先生から「当院における上肢・手外科診療-慢性疾患編-」という演題でご講演いただきました。手根管症候群や肘部管症候群などの絞扼性神経障害に対する手術療法、母指CM関節症に対する鏡視下関節形成、遠位橈尺関節変形性関節症に伴う伸筋腱皮下断裂に対する関節形成・腱移植、尺骨突き上げ症候群に対する短縮骨切りなど、こちらも多くの写真を提示していただきながら、解説していただきました。手の慢性疾患に対しては、患者さんのライフスタイルにより必要となる動作が仕事や趣味によって異なるため、患者さん個々のニーズに合わせて治療することが大切であるとお話しされていました。

最後にリハビリテーション部作業療法士の佐竹敬太先生から「当院における手の外科領域に対するハンドセラピー」いう演題でご講演いただきました。ハンドセラピーは障害を負ってしまった手の機能訓練から対象者の社会復帰に至るまでのトータルサポートを目指す専門領域であり、2020年度森実圭先生着任後から処方件数が増加し、2023年度の実績は250件（入院153件・外来97件）で、現在6名の作業療法士で治療にあたっているとのことでした。末梢神経断裂、神経縫合術後または絞扼性神経障害の患者さんに対しての精密知覚機能検査（Semmes Weinstein monofilament test）について、上肢や手指の装具作製について、また手指伸筋腱修復後のハンドセラピー（リバースクライナート法・リバースデュラン法）について、実際の事例を提示していただきながら、解りやすく説明していただきました。患者さんの仕事内容を職場と共有して個々のニーズに合わせて治療することの重要性を教えてくださいました。

以上、2名の先生方からの講演を終え、会場では活発な質疑応答が行われました。出席者からのアンケートでも講演内容は期待通りで、ほぼ理解できたとの回答をいただいております。有意義な会であったと思われれます。今後、手外科疾患でお困りの症例がございましたら、当院へご紹介いただければ幸いです。

⑤ 「文句の多い医者をつぶやき」 腎糖尿病センター長 岡本 賢二郎

小学生の時メンヘラだった話

メンヘラをググってみる。「心の病気を持った人」を意味するネットスラング。メンタルヘルス掲示板の住民が掲示板のことをメンヘルと略し、その後自分たちのことをメンヘラと名乗ったことから最終的にメンヘラとなったようだ。

メンヘラという言葉は接頭語としても使われ、女性がストーカー行為をするとメンヘラ女子などと言われる。自分も小学生の時には好きな女の子について行って相手の家に上がり込み、おやつまでもらったことを思い出したが、この行動は幼いからと言って許されるのだろうか？小学生 ストーカーでググってみると多くの人が小学生のストーカー行為で対処に困っていることに驚く。今更だが、自分がメンヘラ小学生？であったことに気付かされた。50年前はそれが許される時代だった、ということにしよう。メンヘラが問題行動を伴う場合、ストレス退行から小学生並みに前頭葉の機能低下した本人にとっては、問題行動が心を守る行動である事を理解することも必要かもしれない。（自分のストーカー行為を擁護しているみたいですが、そういう事ではありません念のため）

ネットスラングだったメンヘラは、メンタルヘルス不調者に対して今では普通に使われだした。それは、精神的な問題で休職退職する人の増加とも関係しているようにも見える。2023年に厚労省の発表したデータでは過去1年にメンタルヘルス不調で1か月以上の休職者がいる大企業の割合は90%を超える。特にメンヘラ医療従事者の増加は外国でも問題視されてきている。

メンタルヘルスはフィジカルヘルスと同様に重要なことはいまさらだが、フィジカルな病気の既往がない人はいても、自己のメンタルに問題はなかったと言える人は少ないのではないだろうか？自分のメンタルに傷がないと言えるなら、皮肉抜きで、おめでたいと思う。悩みや辛さは程度が異なるだけで皆それぞれに抱えているのが普通で、人間関係や近親者との別れ、加齢、そして疾病を契機として、誰しもがメンヘラになり得る事の認識は必要だろう。自分もかつてメンヘラであり、これからもメンヘラになりうる事を前提に、他者の心に配慮できるようになりたいものだ。そして身体だけではなく、心に傷を負った人に対してもカウンセリング等で共に考え歩んでいけるようにサポートできることは、医療者に必須のスキルとして、今後ますます重要視されるようになると思う。



⑥次回の医療連携懇話会のお知らせ

<リンク先> 愛媛県立中央病院ホームページ

お申込・詳細はコチラから [Click!](#)

第137回 医療連携懇話会

日時 令和6年7月10日(水)

・講演 19:00~20:30 ・意見交換会 20:30~21:30

テーマ 県立中央病院をまるごと ご紹介します

場所 ANAクラウンプラザホテル松山(松山市一番町3-2-1)
ダイヤモンドボールルーム(本館 4階)

司会 愛媛県立中央病院 地域医療連携室長 二宮 朋之

演者 愛媛県立中央病院 各診療科主任部長

演題 各主任部長による『診療科のご紹介』

参加費 5,000円

お申し込み方法 お送りした申込書をFAXしてください。返信締切: 6月26日(水) 12:00

意見交換会は立食形式で行います。万障お繰り合わせの上、ぜひご参加ください。

第138回 医療連携懇話会

日時 令和6年8月21日(水)

・講演 19:00~20:00予定

テーマ がん治療センター症例検討会(仮)

場所 愛媛県立中央病院 講堂

座長 愛媛県立中央病院 がん治療センター長 名和 由一郎

詳細は

ハガキ・メール・ホームページで
お知らせいたします



第139回 医療連携懇話会

日時 令和6年9月11日(水)

・講演 19:00~20:00予定

テーマ 新規治療(ルタテラ)(仮)

場所 愛媛県立中央病院 講堂



<リンク先> 愛媛県立中央病院ホームページ

こんな
メリットが
あります

お申込・詳細はコチラから [Click!](#)



媛さくらネット

地域医療連携 ネットワークサービス 媛さくらネット
<2024年現在閲覧できる項目>

・処方・注射・検体検査・病名・※退院時サマリ・画像(放射線、エコー、生理検査)
・循環器動画・放射線画像診断レポート(退院時サマリは2023年4月1日以降の情報となります)

参加
無料

次号の地域連携室便り

次回9月号(No.46)は、2024年9月中旬頃刊行の予定です。お楽しみに!



メール登録のご案内



各種ご案内やお知らせ（医療連携懇話会案内・地域連携室便りなど）はメール配信を推奨させていただいております。他、県立中央病院ホームページのタイムリーな更新情報も順次配信予定です。メールでの配信を希望される医療機関様につきましては、お手数ですが、下記メールアドレスへ医療機関名を記載し、送信をお願いいたします。

動画視聴のみを希望される医療機関関係者の皆様のご登録も受け付けております！

メールの
ご登録で…

- ・ 医療連携懇話会の限定公開動画がご覧いただけます
- ・ 医療連携懇話会のご案内
- ・ 地域連携室便りの更新のご案内
- ・ 毎月外来診療予定表 などが届きます！



ご意見・ご要望も
お寄せください



動画配信の
3つのポイント！



①
好きな
場所で



②
好きな
時間に



③
繰り返し
再生！



◆お申し込み方法①

・ 下記の地域医療連携室のメールアドレスへ、以下を記載し送信してください。

＜件名＞ メール登録（医療機関名）

＜本文＞ 医療機関住所、電話番号

＜動画視聴のみのご希望の場合＞ 「**限定公開動画のみ**」と記載をお願いします

E-Mail : c-renkei@eph.pref.ehime.jp

◆お申し込み方法②

・ 本用紙でのお申し込み

キリトリ ✂

・ 愛媛県立中央病院 地域医療連携室に下記の登録をいたします。

＜医療機関名＞ _____

＜医療機関住所＞ _____

＜電話番号＞ _____

＜動画視聴のみのご希望の場合＞ 限定公開動画のみ希望（チェックをお願いします）

＜メールアドレス＞ _____ @ _____

ご記入いただきました個人情報、必要なセキュリティ対策を講じ、厳重に管理し、メール送信の目的にのみ利用させていただきます。